

資 料

市町村保健師を対象とした地域アセスメントと 事業計画に関する研修会の評価

A evaluation of the workshop about community assessment and planning of health services
for public health nurses.

山路真佐子, 千田みゆき, 菊池チトセ, 荒川博美, 松岡由美子

Masako Yamaji, Miyuki Chida, Chitose Kikuchi, Hiromi Arakawa, Yumiko Matsuoka

キーワード：保健師, 研修, 評価, 地域アセスメント, 事業計画

Key words : public health nurses, workshop, evaluation, community assessment, planning of health services

要 旨

A 県内の隣接した2つの地域で働く保健師を対象として地域アセスメントと事業計画に関する研修会を実施し、その評価を行うことによって市町村で働く保健師にとっての有用な研修内容や方法を明らかにすることを目的に、研修会の終了後にグループインタビューを実施した。質的記述的に分析した結果、カテゴリーとして【基本にたって展望が持てる研修】【実践的な研修】【グループワークの重要性】【楽しく学ぶ効果】【大学教員の関わり方による効果】【研修の活用】【次回への課題】が抽出された。これらのことから研修会は参加した保健師にとって職場で活用しうる実践的内容であり、方法も概ね適切であった。今後も保健師のニーズにあわせた研修会を継続していくことの必要性が示唆された。

I. はじめに

近年の少子高齢化や生活習慣病の増加等により、地域社会における保健活動は今まで以上に重要になってきている。地域保健活動の中心を担う保健師の活動には、住民の健康意識の向上・健康課題の明確化による取り組みの推進・長期的視点からの予防活動の推進・住民や関係機関と協働しサポートシステムを構築することによる健康的な地域社会づくり(山口,1999)などがあり、保健師の活動はますます期待されている。保健活動を実施するうえで保健師の専門的能力や技術を向上させるための研修や学習の場が必要であるが、系統的で実践的な継続教育のプログラムは未確立(佐伯,2004)であり、

現場で働く保健師の求めるものになっていない場合が多い現状である。

このような状況をふまえ、平成20年に地域の保健師がどのようなことに困っているのか、どのような専門的能力を向上させたいと思っているのかを調査した結果、地域で働く保健師は地域のアセスメントや事業計画立案・事業評価について学習の必要性を感じていること(山路,2008)や地域診断に関する課題(山路,2010)が明らかになった。地域の保健活動を行う保健師にとって、地域の健康について把握する活動は重要であり(吉岡,2006)、地域保健活動を行う際の基盤となるもの(Spradley,1991)である。地域の健康問題のアセスメントについて保健師が強化すべきと考えている

受付日：2010年10月15日 受理日：2011年2月7日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科

こと(村山, 1998), 保健師が必要と思う能力として地域の健康課題の明確化能力(塩見, 2007), 保健師の保健計画・施策化能力を強化するための研修内容として地域の健康問題アセスメント(村山, 2000)があげられている。しかし, その反面, 保健師にとって地域のアセスメントの困難さ(佐伯, 2001), 既存資料の収集・分析に関する問題(山口, 2004)や日常の業務と連動した地域のアセスメントの方法が明確化されていないこと(吉岡, 2006)が指摘されている。このような現状に対して, 保健師の専門的能力の向上の為の研修会の内容や方法を明確にしていくことは, 保健師の活動の質が向上し, 地域住民の健康の向上につながるという点において社会的に非常に意義がある。また, 教育研修方法(井上, 2006), 管理研修の評価(成木, 2009), 研修プログラム(村山, 2000; 河原田, 2007; 佐伯, 2009)について述べたもの等はあるが, 地域アセスメントに関しての具体的な研修方法に関するものは見られない。

そこで, 本研究では, 地域のアセスメントと事業計画についての研修会を実施し, その評価を行うことによって, 市町村で働く保健師にとって有用な研修内容や方法を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研修会の実施

研修会の対象者は, A 県内の隣接した2つの地域で働く保健師とした。研修会の目的は保健師の専門的能力の向上を目指すためであり, 時期は, 平成 21 年 3 月, 5 月の 2 回実施した。内容は平成 20 年に実施した調査で保健師が学習の必要性を感じていると明らかになった, 地域アセスメントと事業計画についてとした。事業計画については, 事業計画立案と事業評価の内容を含むものとした。参加した保健師が段階的に内容を理解できるようにそれぞれの研修の具体的なテーマを, 1 回目は「地域のデータを活かす」, 2 回目は「事業計画と評価へ」とした。2 回とも参加できることが望ましいものであったが 1 回の参加でも可能とした。

研修方法は, 研修後も保健師自身が実施できるようにするためにグループワークを取り入れた参加型とした。1 回の研修の構成は, 20 分程度の講義と 60 分のグループワーク, 10 分程度の全体での意見交換とした。グループワークは保健師の日常の保健活動に結びつくように, それぞれの地域においてアセスメントに必要と思われる資料(地域にある各種の情報やデータ)を参加者に持参してもらった。まず, 参加者それぞれが思いえがいている理想の地域について語り, 次に参加者自らが実際に地域のアセスメントとそれに基づいた事業計画立案・事業評価等を行うこととした。アセスメントツール

として, コミュニティアズパートナーモデル(Anderson, 2007)を用いた。研究者は講義の部では講師, グループワークの部分ではオブザーバーの立場で関わった。グループワーク時は, 参加者の作業進行状況を把握し, 情報の分類方法やアセスメントの考え方, 計画に関する考え方等について助言を行った。

研修会の参加者は 1 回目 12 名, 2 回目 14 名であった。

2. グループインタビューの実施及び分析の方法

研修会の評価を行うために, 平成 21 年 5 月の 2 回目の研修後にグループインタビューを行った。グループは所属によって分けず 1 グループで行い, グループインタビューのテーマを「研修会の内容・方法について」とした。グループインタビューは許可を得て録音し, 逐語録の作成後, 内容を質的記述的に分析した。

III. 倫理的配慮

研修会について, 研究の主旨と参加の自由の保障等を説明し, 協力を依頼した。研修会の参加は自由意思とした。グループインタビューについては, 研修会の参加を募る時にインタビューについても説明し, 研修会終了後に改めて参加者を募った。グループインタビューでは, 研究の主旨, グループインタビューの方法, プライバシーの保護, 参加の自由の保障, グループインタビューの拒否・中断の保障, インタビューは録音すること等を口頭と文書で説明した。録音したインタビュー内容は逐語録にし, 個人が特定できないように分析すること, 記録は研究者以外は使用できないよう保管すること, 録音したもの及び逐語録を研究終了後は速やかに破棄すること等も説明した。グループインタビューへの参加は, 文書にて同意を得た。また, インタビュー中は参加者を番号で呼び合い, 匿名性の保持に努めた。

IV. 結果

グループインタビューの参加者は 9 名であり, 研修会の参加については 2 回参加 7 名, 1 回参加 2 名であった。保健師経験年数は, 5 年未満 4 名, 10 ~ 14 年 3 名, 15 ~ 19 年 1 名, 20 年以上 1 名であった。(表 1)

表 1 インタビュー参加者の保健師経験年数
人数(人)

5年未満	4
5~9年	0
10~14年	3
15~19年	1
20年以上	1

グループインタビューの内容を分析した結果、16 サブカテゴリー、7カテゴリーに分類された。カテゴリーとして【基本にたって展望が持てる研修】【実践的な研修】【グループワークの重要性】【楽しく学ぶ効果】【大学教員の関わり方による効果】【研修の活用】【次回への課題】が抽出された。【基本にたって展望が持てる研修】【実践

的な研修】は研修内容の評価であり、【グループワークの重要性】【楽しく学ぶ効果】【大学教員の関わり方による効果】は方法、特にグループワークを取り入れた研修への評価であった。以下、それぞれの内容において、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、コードは「」で記す。(表2)

表2 研修会の内容・方法の評価

カテゴリー	サブカテゴリー	代表コード
基本にたって展望が持てる研修	理想を語れる研修	目指す姿を話しあえると事業展開にも共通認識がもてる
		年代を超えてありたい姿を語れる
	基本の見直し	基本を見直すことができ新鮮だった
		保健師活動の本来のあり方が学べた
	視野が広がる内容	多方面から考えられ視野が広がった
		新しい地区診断の方法を学べた
実践的な研修	実践的で活用しやすい内容	実践に即しているので、わかりやすい
		活用できそう
グループワークの重要性	意見交換の重要性	実践的な話し合いにより、実施中の事業の必要性が再確認できた みんなの話を聞くことは今後の仕事に有益であった
	グループワークの効果	グループワークで先輩の意見を聞くことで具体的な取り組み方がわかった グループワークでは自分達の思いが出せる
	全員で持つことができた共通認識	みんなで意見を出し合うことで共通理解ができた 職場のみんなで参加したので同じ立場に立てた
	コミュニケーションスキルの向上の機会	自分の考えや思いを表現することは仕事の上でも必要だと思った 専門職として人に伝える技術を向上させる機会になればいい
	新任者も参加できる話し合い	新任者でも意見が言える話し合い 新任でも学生時代に培った知識や自分の思いを発言できる
	楽しく学ぶ効果	楽しかった研修
日常と違う空間で気楽に話せて楽しかった		
先入観や制約がなく後輩の意見も受け入れることができ楽しかった		
意見交換は楽しかった		
関心の高い研修	働いている地域の資料や事業から考えるので関心が高い	
大学教員の関わり方による効果	大学教員による支援	大学教員の前向きな助言にエンパワーメントされた 話し合いに大学教員のサポートがあるのはいい 大学教員の助言で視野が広がり理解が深まった
研修の活用	継続的な研修の希望	継続的に研修会がしたい 定期的にやってほしい
	研修内容の活用の希望	実際に職場でやってみたいと思った できそうだという感触をつかんで自信がついた このようなグループワークを日頃の話し合いにも活かしたい
次回への課題	テーマを絞ること	一つのこと絞って話し合って具体化したい
		テーマがあると話しやすい
	時間不足	時間が足りなかった

【基本にたって展望が持てる研修】には、3つのサブカテゴリーが含まれていた。『理想を語れる研修』には「目指す姿を話しあえると事業展開にも共通認識がもてる」「年代を超えてありたい姿を語れる」が抽出された。『基本の見直し』には「基本を見直すことができ新鮮だった」「保健師活動の本来のあり方が学べた」があった。『視野が広がる内容』には「多方面から考えられ視野が広が

た」「新しい地区診断の方法を学べた」があった。

【実践的な研修】のサブカテゴリーとして、「実践に即しているので、わかりやすい」「活用できそう」を含む『実践的で活用しやすい内容』があがった。

【グループワークの重要性】には、5つのサブカテゴリーが含まれていた。『意見交換の重要性』には「実践的な話し合いにより、実施中の事業の必要性が再認識で

きた」「みんなの話を聞くことは今後の仕事に有益であった」があった。『グループワークの効果』では「グループワークで先輩の意見を聞くことで具体的な取り組み方がわかった」「グループワークでは自分達の思いが出せる」があった。『全員で持つことができた共通認識』では「みんなで意見を出し合うことで共通理解ができた」「職場のみんなで参加したので同じ立場に立てた」があった。『コミュニケーションスキルの向上の機会』では「自分の考えや思いを表現することは仕事の上でも必要だと思った」「専門職として人に伝える技術を向上させる機会になればいい」があった。『新任者も参加できる話し合い』では「新任者でも意見が言える話し合い」「新任でも学生時代に培った知識や自分の思いを発言できる」があった。

【楽しく学ぶ効果】には、2つのサブカテゴリーが含まれていた。『楽しかった研修』では「楽しかった」「日常と違う空間で気楽に話せて楽しかった」「先入観や制約がなく後輩の意見も受け入れることができて楽しかった」「意見交換は楽しかった」「楽しいと学べる」があった。『関心の高い研修』では「働いている地域の資料や事業から考えるので関心が高い」があった。

【大学教員の関わり方による効果】には、『大学教員による支援』のサブカテゴリーが含まれていた。それには、「大学教員の前向きな助言にエンパワーメントされた」「話し合いに大学教員のサポートがあるのはいい」「大学教員の助言で視野が広がり理解が深まった」があった。

【研修の活用】には、2つのサブカテゴリーが含まれていた。『継続的な研修の希望』には「継続的に研修会がしたい」「定期的にやってほしい」があった。『研修内容の活用の希望』には「実際に職場でやってみたいと思った」「できそうだという感触をつかんで自信がついた」「このようなグループワークを日頃の話し合いにも活かしたい」があった。

【次回への課題】には、2つのサブカテゴリーが含まれていた。『テーマを絞ること』には「一つのこと絞って話し合って具体化したい」「テーマがあると話しやすい」があった。『時間不足』では「時間が足りなかった」があった。

V. 考察

1. 研修内容の評価

研修会はまず、どのような地域であってほしいかをグループメンバーで語り合うことから始まった。参加者それぞれが年齢や職位を超えて自己の地域づくりの夢や思いを共有することができたことは、サブカテゴリー『理想を語る研修』の抽出につながったと考える。また、サブカテゴリーに『基本の見直し』が抽出されたが、

これは参加者の9名中5名が保健師経験10年以上であり、日ごろの多忙な業務の中では意識されていない保健師活動の基本的知識がこの機会に意識化されたことを表わしていると思われた。『視野が広がる内容』にはコード「多方面から考えられ視野が広がった」や「新しい地区診断の方法を学べた」が含まれるが、これは、アセスメントツールを用いた地域アセスメントをすることにより多側面から精緻に地域を把握することができたと感じ、またコミュニティアズパートナーモデル (Anderson, 2007) が比較的新しいアセスメントツールであることから、保健師経験10年以上の保健師がこのことを新しい地域診断の方法として捉えたことによると思われた。吉岡ら (2001) は、保健師の日常業務と連動した地域アセスメントの方法が明確になっていないと指摘しているが、今回の研修では参加者がそれぞれに持参した担当地域の資料を使用したため、研修後はすぐに担当地域で活用できる【実践的な研修内容】であったと感じられたと考える。これらから、参加者にとってこの研修は、保健師活動の基本を見直し将来を展望することのできる内容であり、実践的であったと感じられるものであったということが考えられる。

2. 研修方法の評価

現在、分散配置が進み、事務処理から相談業務、事業展開、関係各所との調整業務等々、保健師一人当たりの業務量は増加の一途をたどっている (山口, 2004)。保健師の日常業務においては、各担当業務に関するミーティングはあっても、地域全体の将来像や問題点について先輩保健師から助言を得たり話し合ったりする機会は乏しい。今回の研修はグループワークを中心とした方法を採用した。その結果、『グループワークの効果』を実感し、メンバー間の『全員で持つことができた共通認識』『意見交換の重要性』に気付くことができ、『新任者も参加できる話し合い』ができたという効果が得られた。信頼関係を確立し円滑に保健師活動を推進するためには、コミュニケーションは非常に重要である (佐甲, 2009; 堀井, 2009)。しかし、研究者らが実施した前回の調査 (山路, 2010) では、市町村保健師の活動の課題として保健師間におけるコミュニケーションの不足が見出された。今回の研修には、新任者から保健師経験20年以上のものまでが参加して、一つの地域をアセスメントし事業計画及び事業評価について話し合った。そのため、新任者は保健師教育の中で学んだことを生かしつつ新鮮な視点で考えたことを発言し、経験の長い者は蓄積された豊かな経験知や保健師活動についての思いを語る機会になった。そして、このことは、『コミュニケーションスキルの向上の機会』になったと実感することにつながったと考える。これらのことから、参加者もグルー

プワークの重要性を認識することになり、方法としてグループワークを採用したことにより多くの効果が得られたと思われた。

また、参加者にとって『関心の高い研修』『楽しかった研修』となったが、学習効果を上げ、継続的な学習を促進するためにはこのような内発的動機づけが重要である(鹿毛, 1995)。グループワークという方法をとったことにより、活発な意見交換ができ、それによって参加者は上述のような【楽しく学ぶ効果】を実感していた。肯定的な感想をもったことは、今後の研修への参加等、主体的な学習を促すことにつながると思われた。

大学の使命として地域貢献が謳われて久しいが、大学や教育機関は人材育成プログラムや研修会での助言あるいはスーパーバイズの役割があり(佐伯, 2008)、各自治体の保健師の卒後教育に貢献する必要がある(岩本, 2007)と言われている。今回の研修参加者は、大学教員の助言にエンパワメントされるなど、『大学教員による支援』を体験していた。このことは、大学教員が効果的に関わったことを示すと同時に、教員の関わり方の重要性を示唆するものと考えられる。大学教員は、卒後教育においても効果的な支援を提供できるよう、さらなる研鑽が必要と思われる。

3. 研修内容の活用の可能性と次回の研修への課題

今回の研修に関して「実際に職場でやってみたいと思った」「できそうだという感触を掴んで自信がついた」「このようなグループワークを日頃の話し合いにも活かしたい」が含まれた『研修内容の活用の希望』が抽出されたことから、参加した保健師にとって職場で活用できるものであったと考える。また、研修そのものについても「継続的に研修がしたい」「定期的に行ってほしい」という『継続的な研修の希望』が抽出されたことから、今後も研修会を継続していく必要性が示唆された。さらに、今回実施した研修よりもさらに『テーマを絞ること』によって、参加者が話し合う時間を十分にとることは可能であると考えられる。そのようにすることによって「時間が足りなかった」という『時間不足』を改善した研修が実施できると考える。今回は2つの地域の保健師を対象とした研修であったが、今後は大学の持つ人材や教育のノウハウを地域に貢献するために、さらに対象を広げての研修ニーズの把握及び研修の実施の必要があると思われる。

4. 今後の課題

今回は2地域の保健師を対象としたものであったので、今回の結果を基に一般化するために対象者数や対象地域を広げることが必要と考える。

VI. 結論

2つの地域で働く保健師を対象に研修会を行い、研修会終了後にグループインタビューを実施した。質的記述的に分析した結果、16のサブカテゴリからなる7つのカテゴリ【基本にたって展望が持てる研修】【実践的な研修】【グループワークの重要性】【楽しく学ぶ効果】【大学教員の関わり方による効果】【研修の活用】【次回への課題】が抽出された。保健師が学習の必要性を感じている内容を基盤にして実施した研修会は、参加した保健師にとって職場で活用しうる実践的内容であった。方法としてグループワークを取り入れたことは適切であった。今後も保健師のニーズにあわせた研修会を継続していくことの必要性が示唆された。

謝 辞

ご協力いただきました保健師の皆様にご感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成20年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費の助成を得て行った。

文 献

- Anderson E.T. (2004) / 金川克子・早川和生監訳 (2007) : コミュニティ アズ パートナー 地域看護学の理論と実際 (第2版), 医学書院, 東京.
- 堀井とよみ (2009) : ネットワーク形成に求められる他職種とのコミュニケーション, 保健師ジャーナル, **65** (7), 561-568
- 井上清美, 岡本玲子, 塩見美抄, 他3名 (2006) : 保健師の専門能力向上に関する研究1 現任教育担当者が効果的と感じた教育研修方法, 日本公衆衛生雑誌, **53** (10), 463.
- 岩本里織 (2007) : 保健師の専門能力習得に向けた卒後教育体制の課題と改善方策について, 主任研究者 岡本玲子, 厚生労働科学研究費補助金地域健康危機管理研究事業 変革期に対応する保健師の新たな専門技術獲得に関する研究 平成18年度報告書, 85-92.
- 鹿毛雅治 (1995) : 内発的動機付け, 宮本美沙子・奈須正裕 編者, 達成動機の理論と展開, 金子書房, 東京, 133-159.
- 河原田まり子, 佐伯和子, 和泉比佐子, 他3名 (2007) : リーダーシップ能力の自己評価の変化から見た保健師指導者育成プログラムの効果, 看護総合科学研究会誌, **10** (3), 13-24.
- 村山正子, 丸山美知子, 山崎京子 (1998) : 保健計画・施策化能力の育成に関する研究—能力を構成する要素とその現任教育の必要性—, 保健婦雑誌, **54** (3), 220-228, 1998.

村山正子, 丸山美知子, 山崎京子, 他 5 名 (2000) : 集合研修プログラム案および職場内教育 (OJT) の方法の開発, 保健婦雑誌, **56** (3), 215-223, 2000.

成木弘子, 奥田博子, 米澤純子 (2009) : 保健師の現任教育に関する評価の現状と課題, 保健医療科学, **58** (4), 370-376.

佐伯和子, 和泉比左子, 加藤欣子他 1 名 (2001) : 保健活動における地域の看護アセスメントの課題—保健師の認識を通して—, 日本地域看護学会誌, **3** (1), 142-149.

佐伯和子, 和泉比左子, 宇佐美代子他 1 名 (2004) : 行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力の発達—経験年数群別の比較—, 日本地域看護学会誌, **7** (1), 16-22.

佐伯和子 (2008) : 保健師の現任教育と研修制度のあり方について, 日本地域看護学会誌, **11** (1), 24-26.

佐伯和子, 大野昌美, 大倉美佳, 他 4 名 (2009) : 地域保健分野における保健師育成の OJT に対する指導者の意識と組織体制, 日本公衆衛生雑誌, (56) 4, 242-250.

佐甲隆 (2009) : 保健師とヘルスコミュニケーション, 保健師ジャーナル, **65** (7), 522-529.

塩見美抄 (2007) : 保健師が必要と思う能力と能力獲得のためにしたいこと—経験年数, 自己研鑽状況による検討—, 主任研究者 岡本玲子, 厚生労働科学研究費補助金地域健

康危機管理研究事業 変革期に対応する保健師の新たな専門技術獲得に関する研究 平成 18 年度報告書, 78-84.

Spradley B. W. (1991) / 村嶋幸代, 野地有子監訳 (1998) : 地域看護活動の方法, 医学書院, 東京.

山口佳子 (1999) : 行政サービスとして機能する看護職が果たそうとしている役割, 日本地域看護学会誌, **1** (1), 56-62, 1999.

山口佳子, 塚原洋子 (2004) : 地域診断の現状, 平野かよ子編著, 地域特性に応じた保健活動—地域診断から活動計画・評価への協働した取り組み—, ライフ・サイエンス・センター, 東京, 75-85.

山路真佐子, 千田みゆき, 菊池チトセ他 1 名 (2008) : 市町村保健師のキャリアディベロップメントに関する研究 平成 19 年度プロジェクト研究報告書, 1-38.

山路真佐子, 千田みゆき, 菊池チトセ (2010) : 市町村保健師のキャリアディベロップメントに関する研究—保健師の活動の課題—, 埼玉医科大学看護学科紀要, **3** (1), 25-29.

吉岡京子, 村嶋幸代 (2006) : 保健師による地域アセスメントに関する文献レビュー, 日本地域看護学会誌, **8** (2), 93-98.